

広島大学平和科学研究センター

Newsletter

2009年



〒730-0053 広島市中区東千田町 1-1-89

tel: 082-542-6975 fax: 082-245-0585

email: heiwa@hiroshima-u.ac.jp

http://home.hiroshima-u.ac.jp/heiwa

脱冷戦型秩序形成への自己変革にむけて

広島大学平和科学研究センター客員研究員 遠藤誠治
(成蹊大学法学部教授・日本平和学会会長)

世界は急激な秩序変動の過程にある。米国オバマ政権は、対話と多国間協力に基づく世界秩序へと再編成を進めつつある。深刻な経済危機のゆえに前途は多難だが、新自由主義とブッシュ政権によって深められた国際社会の亀裂を克服しようとする政治的意志は明確に表現されている。「核なき世界」をはじめとする革新的な理想を示して事態を動かそうとする外交姿勢も、実際には非常に鋭利な現実主義に基づいている。

そうした変化が日本にも届いたのが8月末の総選挙だともいえないが、党内に多様な意見を抱え込んだ民主党が、外交政策に関して比較的リベラルな課題を並べたマニフェストを実現できるかどうかは、非常に不透明である。平和主義的な経済大国としての日本の責務は、グローバルな連帯を育むコストを負担し、東アジア地域に安定をもたらす革新的な政策体系を構想・実施することだが、世界秩序や国際関係に関する議論は、総選挙でも皆無といってよいほど低調であった。

むしろ、2000年代の日本では、長期化した不況を背景に、社会全体が内向きかつ懐古的な指向性を強めてきた。さらには、自民党内外の保守派の間では、現実的有効性や政治的波及効果を考えない独自核武装や敵地攻撃能力の確保などを「現実主義的」とするような議論が広がりを見せ、効果への疑問から米国が予算を削減するミサイル防衛への依存を深めようとしてきた。

こうした政策枠組みが続くようでは、オバマ提案の下、米国が安全保障面での核兵器依存を低下させようとするとき、日本が米国の核抑止力の堅持を求めるという構図となりかねない。つまり、世界的な秩序変革の中で、日本がグローバルな核軍縮の機運に抵抗し、変化を阻止する守旧勢力となる可能性が小さくないのである。

原因の一端は、日本が冷戦時代の世界像と自己イメージを克服できていないことにある。多くの日本人にとって、冷戦こそが高度成長と経済大国化の時代であり、その国際的枠組みは成功体験として内面化されている。冷戦後の国際社会の枠組み作りが行われた90年

代、日本は日米関係の再定義を基軸として、東アジアにおける冷戦的枠組みを再確認・深化させ、自覚的に冷戦的対立を克服する政策や地域秩序像を構築できなかつた。その結果、北東アジアには冷戦期の対立構造は再編成されて生き残り、さらに北朝鮮の核兵器というより深刻な問題に直面せざるをえなくなったのである。

今年早々、シュミット元首相らドイツの大物政治家から「核なき欧州」という提案がされた。2007年来のキッシンジャーら米国の現実主義者からの核軍縮提案に呼応するものだが、そこには冷戦を自らの力で終焉させ、平和と人権の秩序を形成したことへの自負が表現されている。実際、1975年のヘルシンキ合意以来の東西間の信頼醸成措置の蓄積や市民社会の連携こそが、欧州冷戦を終結させる大きな力となったのである。

もちろん、欧州の経験は現状の東アジアにそのままは適用できない。透明性を恐れる北朝鮮は信頼醸成措置を容易には受け入れないであろうし、政治体制の相互承認は当面、多くの人々を人間の安全保障を欠く状態に放置することにつながる。それでもなお、北朝鮮の非核化が不可欠で、東アジアの諸問題に軍事的解決がありえない以上、現状で追求されるべきなのは、北東アジアの非核化と新しい地域的な安全保障枠組みの形成である。それは、日本自身が、最終的には核兵器によらない安全保障を模索することを意味する。

その前提となるのは東アジアで冷戦構造を終わらせるという主体的自己変革である。こうした自己変革なしに、現在生じつつあるさらに大きな変動に対応することはできない。

2008年度平和科学研究センター活動

シンポジウム

- 平和科学研究センター第33回シンポジウム「核の被害再考」（2008年11月28日）広島大学東千田校舎において開催
 - 川野徳幸（広島大学原爆放射線医学研究所・助教）
 - 今中哲二（京都大学原子炉実験所・教授）
 - 山本正儀（金沢大学環日本海環境研究センター・教授）
 - 濱谷正晴（一橋大学社会学研究科・教授）
- 第2回日韓平和研究セミナー：韓国・済州大学平和研究所との合同シンポジウム（2008年6月18日）韓国・済州大学平和研究所において開催
- International Conference on Peace Studies Discourse in Education：ロシア・トムスク州立教育大学との合同シンポジウム（2008年9月23-25日）ロシア・トムスク州立教育大学において開催
- Hiroshima International Symposium: Radiation Effects in Semipalatinsk：広島大学原爆放射線医学研究所との共催（2009年3月26日）広島大学原爆放射線医学研究所において開催
- 第3回日韓平和研究セミナー Cooperative Peace Studies and Peace Education beyond Hiroshima and Jeju Island Tragedy：韓国・済州大学平和研究所、済州大学法学部、世界島嶼学会、科研研究会「平和協力への「もう一つの道」」との合同シンポジウム（2009年10月31日）韓国・済州大学法学部において開催

研究会

第 174 回 (2007 年 12 月 12 日)

Dr. Vladimir Rouvinski (Professor, ICESI University, Colombia) Internal Conflict in Colombia: Perceptions, Realities and the Peace-Building Process

第 175 回 (2008 年 1 月 31 日)

Dr. Sergei Shinkarev (Visiting Professor, Research Institute for Radiation Biology and Medicine Laboratory, Head, State Research Center-Institute of Biophysics) Radiation Exposure to the Population Following Chernobyl Accident and Semipalatinsk Nuclear Testing

第 176 回 (2008 年 3 月 6 日) 日韓平和研究セミナー

①日韓大学院生による平和研究ランド・テーブル

②Kim Jin-ho (韓国・済州大学平和科学研究所所長)

The Dilemma of Jeju Islander's Militarization or Demilitarization for the Third Way as the Conflict-Resolution

Kang Kyeong-hee (韓国・済州大学平和科学研究所准教授)

Militarization and Peace in South America: Focusing on the "Plan Colombia"

第 177 回 (2008 年 7 月 9 日)

高田洋子 (敬愛大学国際学部教授) 「20 世紀メコン開拓の中の諸民族」

第 178 回 (2008 年 10 月 29 日)

Tarja Vayrynen (Academy Research Fellow, Institute for Social Research, University of Tampere, Finland) The Role of Silence in Post-Conflict Peacebuilding

第 179 回 (2009 年 1 月 21 日)

Diana Petkova (Associate Professor, Faculty of Journalism and Mass Communication, Sophia University, Bulgaria) National Identity in the Process of Globalization

第 180 回 (2009 年 1 月 27 日)

宮原信孝 (久留米大学文学部教授)、加藤美和 (国連薬物犯罪事務所条約局プログラム・マネージメント・オフィサー)、工藤正樹 (国際協力機構中央アジア・コーサカス部副調査役)、柿澤福郎 (元富士総合株式会社) Current Challenges for Peacebuilding in Afghanistan

第 181 回 (2009 年 2 月 12 日)

毛利和子 (早稲田大学政治経済学術院教授) 「現代中国外交へのアプローチ」

第 182 回 (2009 年 7 月 2 日) 科研研究会「平和協力への「もう一つの道」」との共催

Prof. Robert McMahon (Professor of Ohio State University, USA) The 1971 India-Pakistan War and US Foreign Policy

第 183 回 (2009 年 7 月 6 日) 科研研究会「平和協力への「もう一つの道」」との共催

Prof. Yakov M Rabkin (Professor of Montreal University, Canada) The Zionist Revolution and Modern Jewish Identities

第 184 回 (2009 年 7 月 8 日)

伊藤成郎 (アジア研究所開発研究センター開発戦略研究グループグループ長代理)

Health Insurance in Rural India : Strategies to Assess People's Perceptions

講演会

松尾雅嗣教授退職記念講演会「言葉と平和」（2009年3月2日）

講演会の後、全日空ホテル（広島市中区）にて松尾雅嗣教授退職記念パーティーが催された。川崎信文平和科学研究センター長、初瀬龍平教授（京都女子大学）、佐藤幸男教授（富山大学）など学内外の方々が参集され、松尾雅嗣教授の退職を惜しみながら、これまでの労をねぎらわれた。

出版物

○『広島平和科学』（第30号、2008年）

○研究報告シリーズ（和文）

No.40 篠田英朗（編）『現代平和構築活動の視点から見た広島戦後復興史』

No.41 松尾雅嗣（編）『核の被害再考』

No.42 広島大学平和科学研究センター（編）『平和を拓く』（松尾雅嗣教授退職記念論文集）

○研究報告シリーズ（英文）

No.22 Shinoda, H. (ed.) *Post-War Reconstruction of Hiroshima: From the Perspective of Contemporary Peace Building*

No.23 Matsuo, M., Rouvinski, V., Vega, R.S. (eds.) *Peace and Human Security*

No.24 Uesugi, Y. (ed.) *Toward Bringing Stability in Afghanistan: A Review of the Peacebuilding Strategy*

センター研究プロジェクト

- ・中期計画「人間の安全保障と平和協力」プロジェクト（19～21年度）
- ・サブ・プロジェクト「核被害と復興の研究」（19～20年度）

出版物の予定

- ・『広島平和科学』（第31号、2010年）

移動

- ・退職一教授：松尾雅嗣（2009年3月31日付）
- ・着任一教授：小柏葉子（2009年4月1日付）
- ・退職一事務補佐員：橋村ますみ（2009年5月31日付）
- ・着任一事務補佐員：下手美和（2009年6月1日付）
- ・着任一准教授：川野徳幸（2009年10月1日付）